

図書館通信 — 25 —

1974・2

文献はどこにある

平田 満 男

研究テーマとアプローチの方法さえきまれば、それに必要な文献などというものは、キャベツ畑にころがっていることはないにしても、どこか図書館にいけば大抵はそろっているだろう。そんな風に考えている学生がおおいのには、いささかあきれます。とんでもない。ことに文科系の学問では、文献をそろえることがアルファにしてオメガである、という場合さえあるのです。

文献をあさって、その内容をこまかく吟味するという作業は、とにかく手間と時間のかかる仕事なので、あまりポピュラーではありません。やる気のない人は、「飢えた子供を前にしたとき、紙切一枚の検証に何の意味があるか」などと、したり顔をすることもあります。これは次元の異なる問題をごっちゃにした、頭の悪い人ありがちな暴論というべきでしょう。飢えにくるしむ人間にとって、たとえば「嘔吐」というような作品はまるで無意味であり、じっさいにゲップの出るほど食べさせることが必要なのは、いうまでもありません。自分が現に生きているシチュエーションにそくした鋭い問題意識をもつことと、地道な学問的努力をいやがる怠惰な心情とは、けっして結びつくものではないのです。

文献は手と足で集める

文献をそろえるという仕事の何割かは、じっさい肉體労働といってもよいのです。だからこそ、進歩的観念遊戯のすきな人には耐えられないのではないのでしょうか。さいきんはコピー機械の発達で、ずいぶん楽になりました。ほんの十数年まえまでは、カメラひとつが頼りだったのです。コネや紹介状のおかげで、やっと借りられたシェイクスピアの初期版本の写真版を、35ミリカメラでパチパチと写し、暗室にこもって現像と焼つけをする。それが大学院にいたころの、ぼくの特技でした。いま日本英文学会の会長をなさっている青木雄造先生は、プリントを作らずにスライドを使って、19世紀の長い小説をいくつも読まれたときいています。先生が度の強そうなメガネをかけておられるのは、多分そのせいなのでしょう。

も く じ

- 文献はどこにある
平田満男…………… 1
- 私のすすめたい本
富士川町の住民の公
害斗争記録を読む
安藤 実…………… 3
- 司書を志す人への情報
遠藤英三…………… 4
- 浜松分館だより
映画会について…………… 6
- 教官著作寄贈図書
一本館…………… 3
- おしらせ…………… 2
- 委員会報告…………… 6
- 人事異動…………… 6

しばらくまえ、三島由紀夫が市ヶ谷で腹を切ったとき、この事件にたいする新聞・雑誌の論評を、できるだけ広く集めておきたいと思いました。おぼえている人もあるでしょうが、翌朝はどこの駅にいても、スポーツ新聞のほかは全部うり切れていました。しかたありません。幸い住んでいるのが団地なので、家内の協力をおおぎ、朝日・毎日・読売・サンケイ・日経をほぼ一週間にわたって朝夕刊二部づつそろえることに成功しました（なぜ二部なのか。おわかりでしょうか、スクラップを作るとき、裏にノリをつけるからなのです）

それでも何か大切なものが欠けているような気がします。そうだ、かかる場合に赤旗をおとしてはなりません。早速そちらの方の学生に電話します。ついでにべ平連の方にも連絡をとって、自衛隊のなかの反戦団体が出している「整列ヤスメ」というパンフを手にいれます。三島ファンのある右翼的少年からは朝日新聞の号外をもらいました（ぼくは左右両翼に、いろいろ友人がおおいのです）。こうして集めた資料を特大スクラップ二冊に整理すると、いろいろなことがわかります。東大全共闘が「悼・三島由起夫割腹」というタレ幕をさげたと報道したのは赤旗だけだったとか、この事件について文化人たちがいろいろおしゃべりをしていなかで、大江健三郎と吉本隆明はほとんど何もいわなかったというようなことが、あとになってテルアビブの岡本君が三島の死にあこがれていたと知っても、べつに驚かないですむのです。

本の専門家を大切に

けれども、自分ひとりで行えることに限界があるのは当然ですから、文献あつめをするときはコマメに図書館に足をはこんで、ライブラリアンと仲よしになっておかななくてはなりません。専門的な訓練をつんだライブラリアンのなかには、下手な大学教授などよりもはるかに有能な研究者がいるものです。日本の例をひくと、さしさわりがありますので止めておきましょう。たとえば今世紀はじめのイギリスで、シェイクスピアの本文研究にかんするきわめて重要な業績をつぎつぎに発表したのは、A. W. ボラードとかW. W. グレックというようなライブラリアンだったのです。このような例をそのまま日本にあてはめて考えることには無理があるかも知れません。けれども、はじめ図書館に籍をおかれ、のちに研究者として大成されたというケースは、わが国でもけっして珍しくはないといえるでしょう。

とくに大学の図書館には、ひとつのテーマに長いあいだ取りくんでおられる人がいるものです。こういう人は古書業界に顔の広い場合があります。そうしたつき合いから、明治初期に和歌山で出版された「春情浮世之夢」（これが何とロメオとジュリエットの邦訳なのです）を手に入れたことがあります。同じ人の紹介で、ある有名な新聞記者の蔵書整理のおすそわけにあずかったこともあります。日本近代文学研究のための貴重な資料をふくむ古雑誌、たとえば早稲田文学の島村抱月追悼号（大正7年）や文芸研究の上田敏号（昭和3年）などを手にした喜びは、いささか忘れがたいものです。

本屋さんとも仲よくしておきたいと思います。日本橋の丸善などについて、顔みしりの店員さんとコーヒーの一杯くらいつき合わないというよりは、ありません。新刊・復刊などのニュースを仕入れられますし、ときには倉庫をかきまわして、欲しい本をさがしてくれたりします。ぼくの指導教官は小津次郎という方でしたが、この先生が大病で入院されたとき、まっさきに見舞いに来たのは紀伊国屋書店でした。もっともこれは借金がかかりあったから様子を見に来たのではなかったか、とも考えられます。

本学に来てから、図書館のレファレンスと相互貸借および他図書館の文献コピーには、大変なお世話になっています。その一方、英文学関係の文献が書庫にあまりないのに驚いています。もともと予算が少ないうえに、かなりの部数が各研究室に秘蔵（または私蔵、さらには死蔵）されているので、たとえばケンブリッジ版シェイクスピア全集すらそろっていないという状態で、学生は困らないのでしょうか。情ないことだと思います。（教養部助教授 英語）

■ 教官著作寄贈図書

一本館一

奥村保明（理・助教授）

高速液体クロマトグラフィー

（Kirkland, J. J. 編 奥村保明等訳
講談社 1972）

太田芳三郎（教養・教授）

ジュリアン・ハックスリー自伝 I—II

（太田芳三郎訳 みすず書房 1973）

じょうほう じょうほう じょうほう じょうほう じょ

○「国立国会図書館編『全集・叢書細目総覧』第1巻古典編本巻一―国始から幕末までを扱った全集・叢書で明治以降昭和45年末までに刊行されたもの1034種、約8万タイトルを収録。今年度内に別冊として内容細目総覧を刊行。続いて第2巻現代編、第3巻翻訳編を刊行予定。

富士川町の住民の

公害斗争記録を読む

安藤 実

もみあげを長くして、一見したところヤッコさん風のなんとかいう「未来学者」のことが忘れられない。あれは三年まえ、静岡県でも田子の浦港のヘドロが世を騒がし、マスコミが連日のように公害反対のキャンペーンをやっていたころだった。この「未来学者」は、三年後を予言したのである。三年たったら公害は、騒がれなくなってしまう…と。

「未来学者」は浮気なマスコミと忘れっぽい日本人の性質を、それなりに比較考量して、右のような診断を下したのかも知れない。

今ではもう、この「未来学者」は自分のことを忘れてのことだろう。そうでもなければ、あいかかわらずあの威丈高なものの言いを続けていられるものではないからである。

...

公害を騒ぐ、騒がないという言いかたは別として、公害が現存し、そのもとの生活する住民が居る限り、公害告発は続き、公害絶滅の闘いも続けられる。

われわれの住んでいる静岡県内も、その例にもれない。そこにはやはり、たいていの公害がそろっている。空気も水も、山も町も、道路も港も…汚染されている。したがって又、公害に対する闘いも多種多様である。そして多くの住民は、このために科学を武器とすることを学んでいる。ここに紹介する一冊の本も、そのような成果の一つである。

...

※『日軽金蒲原工場の公害とたたかう富士川町の住民の記録』（1973年10月）がそれである。

この記録をまとめたのは、富士川町の住民である。具体的にいえば、富士川町農協青年部と富士川町いのちと生活を守る会に結集している住民である。

表紙には、みずからの工場敷地を敵の眼からかくすように煙幕状の白い排煙を吐き続ける日軽金蒲原工場の「繁栄」している姿がうつし出されている。そして裏表紙には、富士川町民の詩的精神の豊かさを表現している芦川照江さんのすぐれた詩「民話の涙」が刻まれている。

富士川町は富士川西岸の川沿いの町である。江戸時代から甲州との舟運あり、東海道は富士川渡船のあいの宿でもあり、交通上の要地であった。その意味ではこの町は、もともと富士川と共に生きてきた町である。

この町に日軽金のアルミ電解工場が操業を開始したのは約30年まえのことである。戦時下の軍需会社として、政府や県の手厚い保護が与えられたのはいうまでもない。富士川町民の不幸もまた、ここから始まる。『住民の記録』の表現をかりると、「日軽金蒲原工場は、富士川河口附近の平地70万坪を占め、富士川の全河水、及び本栖湖の水を使用（発電用、約12万KW）…更に新清水火力から15万KWの電力を使用し、年約12万トンのアルミ地金を生産。…その生産工程から排出される煙は常時約10km半径の地帯を包み…」ということになっている。

平地の乏しい川沿いの町の河口一帯の地域がこの工場によって占められていること、この町にとっての母なる富士川の水がこの工場の電力に変えられていること、みかんをはじめ農作物の緑の葉が呼吸する空気、そして住民が呼吸する空気が、この工場の排煙にふくまれるフッ素ガスなどによって汚されていること、これらが富士川町の住民が、この工場によって与えられている自然的「恩恵」である。まさに、惜しみなく奪われているというほかない。

この『住民の記録』は、いわゆる高度成長期の10年間に、3倍にも増えた生産量に応じて、フッ化物、降下煤塵、一酸化炭素などの汚染物質も数倍化して住民を襲っているという現状にあって、「せっぱつまった果てに、なんとかして…自分達の手で富士川町の公害事情及び自然環境…を明らかに」するためにつくられたのである。富士川町の地理、経済、交通、気象、日軽金公害と住民の反対運動の歴史、フッ化物による植物被害、人体への影響、アルミニウムの製錬など多面的な内容が盛り込まれている。調査結果を主体としているだけに、わからないことは正直にわからないと書いてあったりして、微量を扱うことの困難さが読者にも共感できる。問題は多く残されており、その前途は困難に満ちているが、富士川町の人々は着実な歩みを続けることだろう。「未来学者」の未来とはちがった、ほんとうの未来がそこにあるように思う。

（人文学部助教授 財政学及び金融論）

※ この本は、安藤先生より本館に寄贈していただきました。

司書を志す人への情報

遠藤英三

1. 司書の仕事とは？

ここ数年教育学部学生を中心に、司書という職業に関心を持ち、図書館の参考調査係に「司書になるにはどうしたらよいか」という質問が寄せられる傾向が顕著になったので、私は編集部の方からこの稿の執筆を依頼された。

この質問に答えるには、まず司書の仕事について説明しなければならない。一般的に言ってそれは「整理関係」と「奉仕関係」の二つに大別される。整理業務というのは、資料をその性格によって処理して、置く位置を確定し、種々の手掛りを作って必要な資料を迅速に見出せるようにする準備的な作業である。司書個人の教養・専攻に関係なく、あらゆる資料の内容主題を正確に把握して、それに適切な表現（静大図書館で言えば分類記号）を与え、著者・書名・主題のどれからも必要な資料の位置を調べることのできる手掛り（目録）を作る。資料にはその図書館の財産である印として蔵書印その他の印章を押し、ラベルに分類等の記号（請求記号という）を記入して貼り、貸し出しのためのカード類をつける。これらの作業は巾広く、しかもかなり深い知識を必要とするばかりでなく、単調で肉体的、精神的重労働である。本を読んでいると仕事にならないので、本が好きというだけでは適性があるとはいえない。緑の下の力持ちとしての仕事に甘んじることのできる地味な持続力と一貫性が要求される。資料の選択収集・雑誌紀要類の処理も重要で困難な仕事だ。

奉仕関係の仕事は司書の仕事としては最もはやかな方である。来館者に明るく、あたたかい態度で接し、積極的に相手の要求を引き出し、それに最も適した資料を提供するのがその業務である。これも巾広く、しかも深い知識を要求とする。その上、整理業務よりも「迅速に」という条件が加わってくるために、余計大変である。求められている主題についてのあらゆる適切な資料を、短時間に探して提供しなければならない。ここは図書館の第一線であるから、自分の心身の調子に関係なく、常に明るく温かく話しかけやすい雰囲気自身をつけていることが要求される。来館者には誰にでも公平なサービスをすることも大切である。

近年は複写の仕事もここでの重要なものになった。

公共図書館などでは自動車文庫の仕事、読書会その他の「館外活動」もあり、これも相当な心身の重労働である。

この大変な仕事に対して与えられる給与は、教員に比しては勿論一般事務職よりも低いことが少なくない。私立大学司書の初任給は一般会社の事務員より現在約1万円低く、昇進の方もうまくいって係長どまりである。公共図書館では給与は一般事務職と初任給の差はないが、昇進の方は課まで上れる人はごくまれである。本当は就学前の子どもから老人まで広い範囲の住民の学習権を保障し、民主主義の最初で最後の砦を守る大切な仕事なのだが、多くの実在する司書はそれが自覚できず、日常の仕事の中に埋没してしまう。それだけに図書館界は若く有為の人材を必要としている。

2. 司書資格を取得するには？

こんな恵まれない仕事なのに現在は供給過剰で、全国の司書課程修了者の中9割以上が図書館に就職できない。司書への道は教員のそれより比較にならない程狭い。その狭い門をくぐる為の司書へのコースを列举してみよう。

(1) 本学卒業後国立図書館短大、鶴見大学（旧女子大）、愛知学院大等で開講される2カ月間の講習を受ける方法である。開講科目は大体図書館通論、図書館資料論、資料目録法・同演習、資料分類・同演習、参考業務・同演習、図書館活動（以上必修15単位）、青少年の読書と資料、図書及び図書館史、図書館の施設と設備、情報管理（この中2科目2単位以上選択）、社会教育、人文科学及び社会科学書誌解題、自然科学及び技術書誌解題、マスコミュニケーション、視聴覚教育（この中2科目2単位以上選択）となっている。開講大学によっては教養課程修了者を短大卒なみに見て、受講させてくれる所もあるから「受講資格」をよく調べて見るが必要で、夏休みに開かれるから卒業前に資格をとってしまった前例もある。ただ男性は「講習司書」でも採用される可能性が大きい、女性の場合はこの資格では採用の可能性はほとんどない。この間の事情は先輩若原和彦君（名古屋市守山区森孝新田字白山350-2 .14棟403

号)に問いあわせるとよい。彼は教育学部卒業後愛知学院大で受講して司書になり、現在名古屋市昭和区鶴舞町の市立鶴舞中央図書館で活躍中だ。(2)昭和50年度までに国立図書館短大別科(1年制、東京都世田谷区下馬4-1-1)へ進学することである。ここでは教養課程修了者を短大卒とみてくれないので、卒業後でない受験できない。しかも51年度から4年制となって筑波へ移転するので、50年度が受験の最後の機会である。数年前まではここを出ると100%就職できたが、最近では京浜地方と、京阪神地方を除いては、ほとんど就職ができなくなっている。受験科目は一般教養(物・化・数を含む)と英語である。競争率は年によって差はあるが、数倍から十数倍という所である。(3)慶応大学文学部図書館・情報学科(東京都港区三田2-15-45)への学士入学か、その大学院への進学の方法がある。ここは他の養成コースが公共図書館の司書を目標とした教育をしているのに、情報センター、大学・専門図書館向きの教育をしており、進路指導でもはっきり公共図書館へは行かぬようにという人もいと聞いている。大学図書館へも進出しているようである。慶応の受験科目は文学部のそれと同じであるが、特に語学力が要求され、内容は程度が高い。図書館学・情報学概説をはじめ必修36、選択28以上の他指定科目8の専門科目計72単位以上及び実習8単位、総計80単位以上の履習を必要としている。(4)3年前から東大大学院教育学研究科修士課程に図書館学専攻の定員が与えられ、現在4人が在籍している。試験科目は外国語と図書館学であり、学部での専攻に制限はないが、図書館学の基礎科目(講習の項参照)は履習していることが望ましいとのことである。(5)通信教育の道も開かれている。卒業後仏教大学(京都市北区紫野北花ノ坊96)が、近畿大学(東大阪市小若江 321)で通信による司書課程が開かれている。しかし近畿地方以外では就職が困難なようで、現在無資格で図書館に勤めている人の資格取得には役立つ方で、講習と大差はない。これは入試はなく受講科目は前記の講習のものに加えて図書館実習があり、夏のスクーリングの際に実施させているようである。

3. 就職するには？

では就職について説明しよう。受験資格に司書資格を必要としない場合もあるが、図書館業務に従事するからには、当然資格を取得しておくべきだろう。

(1)国立機関に就職するには、国家公務員試験の上級乙種(30才未満)か、中級(26才未満)の図書館学部門に合格することである。一昨年までは国立学校図書専門職員採用試験として独立していたが、昨年から上記に吸収された。合格後地域の選り好みをしなければ、確実に採用されるが、競争率は非常に高く、上級乙種で数十～数百倍、中級では数百～千倍単位になることもある。受験科目は一般教養(択一式で数物化英)と専門(図書館学概論、図書館資料論、資料利用法、資料組織論、図書館管理)である。一般教養では語学・法政経済に弱い人は合格できない。専門科目は最新の情報がないので不明だが、従来の択一式だったときには、大学・専門図書館に長く勤務し、理論と実践の双方に強い人でないとできない高度なものが多く、司書課程修了者でも無理なので、これでは差はつかなかったようである。現在はかなり記述式の方法が採用されていると聞いているが、質的变化はないと思う。

(2)公共図書館は、採用方法がマチマチなので、事前に教育委員会に問合わせることが必要である。地方公務員試験で採用されて、図書館へ廻してもらう手もあるが、現実とはいえない。コネクションがないと地方では就職がむづかしいし、欠員ができることが少ないからである。

(3)国立・国会図書館へはいりたい者は上級は記述式の教養科目・外国語・専門科目(社会(1)=法、社会(2)=政経社、人文=文・史・図書館、自然=数物化工)1科目を受けねばならず、中級は記述式の教養・英語・作文を受けるだけでよい。

(4)私立大学図書館でも求人があるが、広く公募しない所が多いので、見当をつけて問いあわせないと機会が得られない。司書課程を持っている大学・短大では外部から採用することは少ない。

(5)民間会社・団体の資料室へも道はある。これはまだ非常に少ないが、少しずつのびて来ている。それぞれの採用試験を受けなければならないが、司書課程のない本学へは求人が来ないから、口さがしが大変だろう。それに身分的には不安定で、不景気が来ると前例によれば最初に人員整理の対象に選ばれることが多い。

以上概説したように、司書への道は多様であるが、どの道も広くはない。特に女性には不利である。しかし可能性がないわけではないし、仕事としては人間が一生をそのために賭ける価値のあるものである。もっと詳しいことは清水市北脇 145の私あてに手紙で問いあわせてくだされば、喜んで御返事を差し上げよう。

(教育学部非常勤講師 図書館学)

